

灰域にて

机上の寝子

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

——絶望を 駆け抜ける

ミナト「ペニーウオート」で対抗適応型ゴッドイーター、通称AGE（エイジ）となった彼女は、この残酷な世界で生きていく。

目次

私たちのイマ	11
AGEという烙印	1

AGEという烙印

私は思った。

ああ、これは夢だと。

両腕が妙に軽い。

お前はバケモノだ。バケモノは、バケモノらしく、人間に害を加えないように拘束しなければ

そう、モノを言わないはずの両腕につけられた腕輪が喋る幻聴が聞こえない。

だからこそこれは夢だと、あの最悪な日の夢だと直感的に理解した。

私の両隣には、片腕だけ腕輪をした男たちが監視についている。

たかだか10歳かそこの小娘に嚴重なことだ。

ここまで来れば逃げることは不可能だと理解しているだろうに。

ああ、そういえば、あの椅子に座るときに暴れるやつがいるらしいからその対策だったのだろうか。

この時の私は体が震えて今にも失神するのではないかと思うほど恐怖していた。

その時だ、目の前の大きな鉄の扉から、両腕にあの忌々しい赤と黒の腕輪を付けた少

年がフラフラと出てきた。その少年が私の顔を見るなり、疲れ切った顔で私を安心させるように笑った。

「へへっ… 心配そうな顔すんなって、俺たちは死なねえ、絶対だ」

いつも見ている彼よりも幼い姿で、いつも聞かせてくれる言葉を言ってくれた。

彼は両腕についている腕輪を重たそうにしながら拳を突き出した。

その拳に震えた私の握り拳をコツンと合わせた。

「もちろんですよ」

気付くと、私はそう返していた。合わせた拳が暖かい。

拳から彼の熱を分け与えてもらっているようだった。

彼が出てきてからずっと閉まっていた扉が、ガシヤンと音を立てて開いた。

扉からは男が歩いてきて、歩行の邪魔だったのだろうか彼を押しつけた。

彼はむっとした顔をしながらよろめき、道を開けたが、男にその反抗的な様子を見られてしまったようだ。

「おい、お前程度の代わりなど、この世界に無駄には存在するのだ。せいぜい俺たちに廃棄されないよう媚びを売る練習でもしておけよ。このクソガキが」

男は人間に向けるとは思えないような目線を彼に送っていた。

私はその目線が怖かったのだろう、男から目線を逸らし、彼を見た。

「次の試験者は： P W O 1 4 0 8 . . . そのお前だ。そのクソガキを見ているお前だ」

この言葉の後に私の顔が男に向く。

そこには、男が私を見下した目で指差している姿があった。

人を人とも思わない冷たい目だ。これから始まる試験で私は人間でなくなってしまうということが否応にも想像できてしまうそんな目だ。

彼の言葉で暖められた身体が凍えてゆく、目の前の人を人と思わないバケモノが恐ろしくてたまらなかった。

「P W O 1 4 0 8 ついていい」

男が私を呼び、前に進みだした。

私の足はゆつくりと男の後ろを歩いていく、扉をくぐる直前、彼の声が聞こえたような気がした。

——絶対だ。俺たちは死なねえ。絶対にな。

目の前の男は何も言葉を発しなかった。後ろの彼も怒鳴られているような気配はなかった。つまり、私の都合のいい幻聴だったのだろう。それでも、凍ってしまった私の身体を再び暖めてくれたこの言葉を大事にしよう。

たとえ……たとえ、ここで死んでしまったとしても

「試験の内容を説明する」

体のあちこちが固定されてまともに動くことができない状態の私は、男が電子板に書かれた内容を淡々と朗読するのをぼんやりと聞いていた。

「この試験は、お前らのようなゴミを対抗適応型ゴッドイーター、通称AGEと呼ばれるモノに作り替える試験だ。喰灰による浸食、神機の実装、対抗適応型オラクル細胞の移植、これらの三段階を行い合否が決定される。試験に落ちれば、お前は……死ぬ。試験に合格できれば、このミナトでお前のようなゴミであろうと働かせてやろう」

説明は終わったのだろう、男は言い試験を開始するボタンの位置まで歩いていく。

この世界は喰灰と呼ばれるオラクル細胞で埋め尽くされている。喰灰の濃度が濃くなると灰域と呼ばれる地域が出来る。灰域は普通の人間が十分も居続けられれば、喰灰に喰われ灰域の一部となるように灰となって消える。

この試験は、その灰域と呼ばれる特殊環境で任務を行わせるために人をバケモノに作り替える。そんな試験だ。

男の顔がこちらを向いた。

人を人と思わない。その眼をこちらに向けてこう言った。

「それでは、ゴミらしくもがけ」

男がボタンを押した

『AGE適合試験を開始します。気を楽しんでください』

女の機械音声が聞こえる。

『第一段階、喰灰による侵食を実行』

左腕に異物が入ってきたような気がする。チクリと痛みが走った。

すぐに左腕の中から噛まれるような痛みが襲って来た。

「うあああ！… ああああ！」

耐えることはできるぐらいの痛みだ。だが、左腕がなくなっていくような感覚に襲われる。

自分の左腕が目の前にあるのに、左腕が痛いのに、左腕の感覚がどんどん希薄になっっていく。

その感覚がたまらなく怖い。

こんな時《に／いつも》思い出すのは《少年／彼》の言葉だ。

——俺たちは死なねえ。絶対だ。

いつの間にか右腕に腕輪がはめられていた。

『最終段階に入ります。対抗適応型オラクル細胞を移植』

女の機械音声が聞こえる。

「あああ…… あああ」

右腕から何かが入ってきた。

身体が作り替わっていくのがわかる。

私がおじやなくなっていく感覚が襲う。

私が動かすことのできる筋肉はほとんどなくなってしまったのだろうか

右腕が動かない。右手が動かない。左腕が動かない。左手が動かない。足が動かな

い。声が出ない。唇が動かない。

息が苦しい。吸えない。吐けない。

思考が進まない。

食べられたくない。生きたい。いきたい。いき…… た…… い……

…… い…… き……

た……

……

意識が覚醒する

『喰灰による侵食の中和を確認、バイタル正常域に復帰。判定……適正あり

おめでとうございます

あなたは対抗適応型ゴッドイーターに認定されました』

女の機械音声が聞こえる。

周りを見渡す。ここは……試験場のようだ。

男がスイッチからこちらに歩いてくるのがぼんやりと見えた。

男の目はまだ見えない。それだけで《私／私》は救われた。

「生き残ったか…… 甲判定…… この辺りじやなかなか見なかつたレアものだな」

男は満足げに電子板と私を交互に見ているような気がする。

その時、役目を終えたとばかりに私を拘束していた器具が一斉に解除された。

前側に存在する拘束具に重心を預けていた私は前のめりに椅子から転げ落ちた。右
手につかんだままの神機を杖に立ち上がりとしたが握力が足りず床に再度倒れた。

そんな姿を見て男は言った。

「ああ、そうだ。試験に合格すれば聞いてやろうと思っていたことがあるんだ」
地べたに這いつくばる私を見下ろしながら男は言った。

「どうだ、人間をやめた気分は」

私たちのイマ

おい…起きろって

やさしい声が聞こえる。

人生…いや、AGE生史上1、2を争う最低な夢を見ていたようだ。

夢の中はあんなに冷たかったのに、ここはとても暖かい。今にも眠ってしまいそう
だ。

このままゆっくりと睡魔に身を任せて、意識を落として……

「おい…起きろー！」

肩を揺さぶられ心地良いまどろみから出るはめになった。

ぼんやりと周りを見回すと、見慣れた鉄格子と私の肩に両手を置いて呆れた顔の彼が
見えた。

私が彼の顔を見たことで目が覚めたと分かったのか、彼は肩から両手を離して片手で
自分の頬を搔いた。

「おはよう。どうした、悪い夢でも見たのか？」

心配そうな彼の顔だ。こちらに手を差し出して起き上がるのを手伝ってくれららし

い。

でも、返事を返すのも起き上がるのもめんどくさくて、ただ、彼の顔をぼんやりと眺めていた。

数秒見つめあったのだろうか。

「はあ……ぼーつとしてないでシャキツとしろよ」

また、呆れた顔の彼が見える。表情が忙しそうで、ちよつと面白い。

……そろそろ返事しないと怒られてしまいそうだ。

寝ころんだままではいけないと思い、赤と黒の腕輪が嵌められた両腕を振りかぶり、勢いをつけて起き上がった。

「おはよう、ユウゴ。今日はひどい夢を見てね。目が覚めるまで、ちよつと、時間がかかっちゃったよ」

「そうか、ならもつと早くお前を起こしてやればよかったな」

ニヤツといじわるな顔をしながら彼、ユウゴ・ペニーウォートは冗談交じりな声で言った。

よかつた、今日は怒られずに済みそうだ。

急にいじわるな顔が真面目な顔に変化した。次の話をするようだ。

「次の仕事のこと、聞いてきた……相当、『濃い』場所だ。俺も、お前も、そろそろオ

シマイが近いってわけだ」

諦めたような口調でこの非情な現実を再確認するようにユウゴは次の仕事を語る。

「あの灰域濃度で仕事ができる日数は1年もあればいい方だ、もし、途中でケガをすればさらに短くなる計算だ。その間、今までと同じようにアラガミの討伐やら、物資の回収やらをしなくちゃいけねえ……………」

『濃い』灰域の中で戦い続けるればやがて身体は朽ち果てる。仕事ができなくなつた俺たちをミナトの連中が甲斐甲斐しく世話してくれるとは到底思わない。いずれ生命線の偏食因子をの投与を打ち切られてアラガミ化…あるいは、アラガミの撒き餌か囷にでもされて、さようならか…」

「ろくでもない未来で、絵に描いたような俺たちAGEの末路だ。だが…」

「だが？」

うなだれるように地面を向いていた彼が、鉄格子の嵌められた窓の外を向いて呟いた。

私は、私の心を奮い立たせるいつもの言葉がユウゴの口から紡がれるのを期待する。

「だが、そうだ、俺たちは死なねえ。絶対だ」

これまでの諦めたような声とは一変し、決意に満ちた声が聞こえる。

この言葉だ。

「俺たちはたくさんの思いを背負ってる。守ってやれなかったこいつらの想いを。俺は……俺は、こいつらに誓ったんだ。どんなことがあっても、絶対に、諦めねえって」
外に向いていたユウゴの顔が自分の腕に嵌めた、いくつものドッグタグを順番に見て、最後に私を見つめる。

私に言い聞かせるように……………自分に、言い聞かせるように
言葉が紡がれる。

「だから、絶対に死ぬなよ……………こんなクソつたれな現実を壊して、一緒にたどり着くんだけ俺とお前で……明日へ」

「……ええ、もちろんよ。相棒を置いて逝ってやるものですか。俺たちは死なない。絶対に……でしょ？」

私は笑っているだろう。頼りになる相棒にこんな告白をされたのだから。

ユウゴがいるから、彼がいつもの言葉をくれるから、私はこの絶望しかない生活でも生きようと、死なないでいようと、そう、心の底から思えるのだから。

「フツ…… ああ、そうだな」

穏やかながら決意に満ちたユウゴの顔がいつもの真面目な顔に戻る。
ユウゴがチラッと私の後ろを見た。それにつられて私も振り返った。

どうやら、看守が戻ってきたようだ。

これだけ長話がある程度の声量でしているのに罵倒の言葉が飛んでこないのが不思議に思っていたが、トイレか、食事か、はたまたサボりでいかなかったようだ。

戻ってきた看守が怒鳴り声をあげた。

「お前らには任務が発給されたはずだ！ さっさとモニターを確認しろ！」

「へいへい、おい、イロリ行くぞ」

サボりがばれて上司にでも叱られたのだろうか。湧きあがっている苛立ちを私たちへとぶつけてくる。

彼に促されて立ち上がり、モニターまで小走りで向かった。

後ろで看守が早くしろ。のろま共が。などとうるさい。看守の言うとおりに十分と急いでやっているのに分からないのだろうか。

「イロリ、次の任務は新しい濃度レベルの順応テストなんだとき。どうやらアラガミはぶつ殺さなくてもいいらしい。久しぶりに楽な任務だな」

「本当ね。最近は小型種の大量討伐やら、ミナトに接近してきた中型種を指定の場所まで誘導しろだの、大変な任務しか発給されなかったからね」

看守がまだうるさいが、ユウゴとこれまでの任務の話をしながら、今回の任務を受諾した。

『新たな行動区域への濃度順応が求められます。順応プログラム216番から234番を実行してください』

D1【濃度適応】

◇高濃度海域内での作戦行為への移行に伴い所定の適応プログラム実行義務を果たす。

〔対象者〕

PW—01408

PW—01407

任務を受諾しますか？

「はい」 「いいえ」

任務を受諾しますか？

▼「はい」 「いいえ」

『受諾を確認』

『なお、行動中の不慮の事故についてはあらゆる事象が自己責任となります』

『特に貸与されている神機を傷つけることのないよう注意を払ってください』

女の機械音声がかえった。

何度もこの音声聞いたが、AGEより神機のほうが高価なものだと言っているよう

な、この音声は気に入らない。

さあ、仕事に行こうか。あの怒り散らしてる看守にこの牢獄から外に出してもらわなければいけない。

「ユウゴ、今日もよろしくね」

「おう、今日も頼むぜ」

笑い合いながら、ガツンと互いの腕輪をぶつけた。

私たちが任務を受けている間では看守の怒りは沈静化されなかつたらしい。

牢獄から出るために扉の前に立つとピーっと甲高い音の後にカシヨンと鍵が取れる音の後、すぐに看守の怒鳴り声が響いた。

「さっさと出ろ！ 遺書なんて残すんじゃないぞ！ お前らの代わりなど二束三文で集めることのできる安い物品なんだからな！」

そんな罵倒の後、まだ怒りが収まらないのか、私が牢獄から出る時、背中を蹴られて地面に倒されてしまった。

両腕が忌々しい腕輪で拘束されているせいでまともに受け身が取れなかつた。

AGEの耐久力は普通の人間よりも数段高いおかげで地面に倒される程度では傷一つつかないが、身体が汚れてしまった。昨日、リルがゴミ拾いで偶然見つけた石鹸を使って私を拭いてくれたからいい匂いがして気分がよかったのに最悪だ。

それで少し溜飲が下がったのだろう。ふん、と息を立てて私の髪を掴んで起き上がり、粘着質な目線を私に向けながら耳元で喋りだした。

「早く歩け、命令違反をするのであれば、お前のような汚らしいAGEの身体でも使つてやろうか?…む、む?」

スンスンと首筋を生暖かい風が通り抜ける。

しまった。石鹸の匂いをに気づかれた。つい、石鹸の誘惑に勝てなかった私のミスだ。

「お前、ミナトの倉庫から石鹸を盗ったのか?そんな懲罰房へ行きかけたのか?んん?」

「ちがう!…昨日、同室のAGEが回収したもので、ミナトの監査官に回収報告は済ませてあるはずだ。確認すれば分かる」

粘着質な声が気持ち悪くて、つい、強めの口調で言ってしまった。

「んっんっ。…言い方がなっていない、人間様にモノを頼むときはどうするか分かるか? AGE君?」

「：：つ昨日のPW—02357の回収報告を：：確認、してください。お願い：：します」

「及第点だ、確認してやろう。寛大なこの私に感謝するがいい」

ギシリと歯噛みする。クズめ、と言ってやりたいが、ここで言ってしまうと命令違反とされて、本当に使われてしまう。冗談めかした言い方で看守程度の地位であっても、その程度は容易に実現可能なのだ。

ペニーウォート内で随一の腕前を持つ私が万が一にも自殺されるとミナトの不利益だからと言った理由で”そういうしたこと”は特例で免除されているが、私自身が明確な命令違反を行った場合はその限りではない。

「ちっ、良かったなAGE。PW—02357はしっかりと報告していたようだ」

私の髪から手を離して肩に手を置いて強く押した。

「さあ、歩け。AGEごときがゴッドイーター様の手を煩わせるんじゃない」

出撃ハッチまで、前からユウゴ、私、看守の並びで歩いた。歩き始めると看守は肩からゆつくりと肩甲骨、背中と撫でまわしつつ、手を滑らせてきた。ちらりと看守を盗み見ると私の戦闘服でちらちらと素肌が見えている腰回りを気にしているようだ。一度認識してしまうと実際に触られているわけでもないのに、私の腰回りにじつとりとネバついた感覚がまとわりついた。

ユウゴも私の状態を察してくれたらしく、看守の怒りを買わない範囲で早く歩いてくれた。流石、私の相棒だ。いいアシストをしてくれる。

看守の手がもう少しでお尻に到達しそうになった時、出撃ハッチに到着した。看守はハッチに着くなり、舌打ちをして踵を返した。牢獄のほうに戻るようだ。

看守の姿が見えなくなると私はホッと胸をなでおろした。何度も行き来した道を歩くだけなのに思ったよりも体力を消費してしまった。

「大丈夫か？」

「ええ、なんとか…。最近はあるなこなかったから油断していたわ」

もう少し大丈夫そうな声を出すつもりだったのに、疲れ切った声しか出なかった。

「今日は俺が運転するから目的地に着くまでの間、お前は休んどけ」

「… そうさせてもらうわ。ありがとう」

「気にするな。次、俺が疲れてるときはお前に運転してもらうことにするからさ」

目の前の対灰域用装甲車に乗り込む。この装甲車は私たちが何度も使っているおかげで初めより多少、使いやすくなっている。後ろの座席に置いてある布を一枚持ってきて椅子にかぶせたら簡易ベッドの完成だ。

「準備できたみたいだな。開けるぞ」

「おねがいね」

ビーっと、けたたましい音でアラートが鳴った。

『任務、D1、【濃度順応】』

『対象者、PW—01408、PW—01407』

『確認しました』

『対アラガミ及び対灰域用防壁、ロック解除します』

『貸与されている神機を傷つけることのないよう注意を払ってください』

『第一ハッチ開放します』

「よしイロリ、発進するぞ。一応、最初だけはしっかりと椅子に座つとけ」

「分かったわ。だいじょうぶ」

装甲車がギュツと急加速して身体に圧力がかかる。

急加速と急停止がアラガミから逃げるために必要だとは言え、もう少し乗り手のことを配慮したものはないのだろうか。

ろくに身体の踏ん張りが効かなくなるようでは神機の銃形態も無意味になってしまうじゃないか。

少して車体が安定したところ、ミナトに通信しようとしていたユウゴにこれから休むことを伝えて瞼を閉じた。